

～卒論と院試(2)～

こんにちは！地理の南です。今回は、4年生時に経験するであろう卒論と院試話の2回目です。4月ごろの卒論演習で、研究テーマが「日中戦争における佐藤外交」に決定したところまででした。自分の発表が終わった後は、他の4年生の発表を聴いているだけで良かったので、夏休みまでは気楽でした。他の4年生の研究テーマも少し見ておきましょう。

- ・「防衛大学校創立にみる吉田茂の軍人観」
- ・「中華人民共和国の人口政策 一計画出産を中心に」
- ・「第16回(1928年)総選挙と立憲民政党 一得票分析からみた選挙地盤とその変化」
- ・「戦後日本の科学者運動 一民主主義科学者協会を中心に」
- ・「日本における原子力発電の導入過程」
- ・「近衛篤磨と対露強硬運動」
- ・「佐藤外交と冀東政権解消問題」(南賢司)
- ・「世紀転換期ボスニア・ヘルツェゴビナにおける教育と近代化の問題」
- ・「ケネディ・ジョンソン政権下におけるイスラエル認識」
- ・「日本における朝鮮民族教育、1948-1952 一京都(ウトロ)における事例」

すごい難しいタイトルばかりですよ。文学部に進むと将来的にはこういう研究をしないとイケないんだと強く思っておいてください。まあ、4年生が書く論文なんてたかが知れているのですが…。

5月からはゆるやかにゼミを受けつつ、自分の研究に関わる書物を読みつつしている間に6月を迎えました。実は、早めにゼミ発表を設定した理由の一つに教育実習がありました。母校(高校)に2週間ばかり毎日通わなければならなかったため、この時期を避けたというわけです。朝の9時から夕方3時まで母校に拘束されるので、その後京大の授業など受けられません。

ここで教育実習の話をしておきます。4年生ともなると、朝一の授業とかなくなって、10:00 と

かに起きる毎日だったのですが、教育実習期間は朝8:30に母校まで行かないといけなくて大変です。朝6:30に起きる健康的な生活リズムに変わり、テレビ大阪で当時7:00からやっていた「北斗の拳」を見てから登校していました。

教育実習はどの大学でも期間が大体一緒みたいで、母校に行くと、1個下の後輩が2人参加していました。2人とも理系で、たぶん物理と数学を担当していたと思います。私は、地歴公民志望だったので、日本史か世界史を教えることになっていました。私の担当教師になったのは日本史の先生だったので、日本史の授業をしてほしかったそうなのですが、ちょうど院試の勉強のために近現代の世界史をせっせとやっていた時期だったので、日清戦争あたりの内容で授業することになりました。日本史でもあり世界史でもある内容で楽だったのです。先生無理言ってごめんなさい(笑)。私は2週間の実習期間のうち、後半の1週間で2回の授業を担当することになりました。たぶん、かなり少ないと思います。優遇されていたはず。最初の1週間は教材作り、一線で教えている先生の授業見学、1日の終わりには他の実習生と担当教師を交えて意見交換会などを行っていきました。あるとき、意見交換会を行っていた部屋のカギを職員室に返却しに行った時、かつて教わっていた数学の先生を見かけました。でも、挨拶はしませんでした。高3のときに、その先生の授業があまりにも難しく、受けていても意味がないかと考えて、土曜1限のその授業をひたすらサボっていたのです。ちょうど2限が体育だったので、体育から参加する土曜日が一般的でした。高3のとある日にその先生に急に職員室に呼びつけられました。その先生が言うには、「お前は私のことが嫌いかもしれないが、言っておくぞ。あと1回でも私の授業をさほれば出席点が足りなくて君は留年する。風邪でも何でもこれから参加するように。大学に行きたくなければ受講しなくてもいいがな(怒)」と脅されます。脅されるって言い方悪いですね、ごめんなさい。そ

強者の戦略

れ以後は全部参加して、受験することはできたのですが、異常に怖い印象があったので、教育実習時に挨拶に行けなかったのです。でも、職員室で見つけてしまって、つかつか寄ってきて、出席簿で頭をこづかれました。「知らない間柄じゃあないんだし挨拶ぐらい来なさいよ！」と、時を超えてまた怒られてしまいました。ほんと、この原稿を書いていると、自分がいかにダメ人間かが分かってきてせつなくなりますね(笑)。2週目に行った授業はぼちぼちの出来でした。自分的には…。

こうして無事教育実習を終え、適当に授業に出ていると夏休みに入ります。まだまだ研究テーマが決まった段階で、何の論も見えていなかったのも、夏中ずーっと書物との格闘です。一日中本を読み続けることがどんなに大変かが身に染みて分かりますよ。朝から3時間重厚な書物をまず読みます。起きたて早々から読書です。眠くなってきた、って言うか二度寝もしますし、何かしょっちゅう金縛りにもあっていたのですが、朝ごはんを食べ、また読書。昼ごはんを食べても読書。そのうち塾講師のアルバイトに行き、帰ってきて読書。正直、この時は、「趣味は読書です。エヘヘ」的な感じの人に嫌悪感さえ感じていました。“趣味が読書って言う人はそもそも本なんて大して読んでないじゃないか！”っていうすさんだ心境です。しかも書物を読んでも、そんなに意にかなった情報を見出すこともできず、こんな感じで日々過ごしても、卒論なんて書けないじゃないか、とも焦ってきます。“こんなときには一丁気分転換だ”と意気込んで、高校球児たちのがんばりを見に甲子園球場を訪れました。選手の動きをぼーっと外野で眺め続けているうちに、短パンから出た足や袖から出た腕が異常に焼けてしまって、火傷状態にまでなりました。もう皮がパリパリです。北京ダックの皮みたいな感じね。足を曲げるだけで引っ張られる感じがあったので、Gパン履くのも大変でした。

そして、10月ごろに2回目の発表を行い、正式に卒業論文のタイトルが「佐藤外交と冀東政権解消問

題」に決まりました。1931年の満州事変、1937年の日中戦争、1941年からの太平洋戦争、そして終戦の1945年までを現代史では「15年戦争」と言います。日中戦争は避けることができたのかどうか、ということは現代史では少し議論のあるテーマで、私は日中戦争直前の佐藤尚武外務大臣の時代に戦争を避けることができたかどうかを、陸軍と海軍の2つの組織を考察することで考えようと思いました。細かい話をする、陸軍は陸軍省と参謀本部、海軍も海軍省と軍令部に分かれていました。陸軍省と海軍省が命令を与える総帥的組織で、実際に敵と戦う兵隊を率いていた部署が参謀本部や軍令部だと考えてください。この4つに属していた人物たちの考え方を、様々な書物や手記などから読み取って、卒論を仕上げていきました。研究することの大変さは、修士論文の話をするときにお伝えしようと思います。今にして思えば卒論作成はそんなにしんどいことではなかったのですね。

卒論の話ばかりしてきましたが、大学院に進もうと思ったら、英語の試験と現代史の試験の2つに合格しなければなりません。院試の英語は京大の入試問題の英語とほとんど変わりません。英作はないですが、和訳が2題出題されます。この英語の採点は総合人間学部の先生がするらしく、N教授に「英語だけは下駄を履かせることができないから、しっかり頑張るんだよ」と言われていました。K村教授の件もあったので心配していたのでしょうか。自分でも英語はやばいと感じていたのも、京大の赤本を再び購入して解いたり、京大の後期の問題を解いたり、院試の過去問を解いたりして、結構がんばりました。実際の試験の出来はいまいちでした。訳すことのできない下線もありました。でも、諦めずに現代史の試験に向かって、数日しかなかったですが、世界史や日本史の勉強もがんばります。こちらの試験もいまいちでした。そして、口頭試問の日を迎えます。卒論は提出するだけで終わりではありません。教授陣が卒論に対して、質問してきて、それに応答

強者の戦略

するということをしなければなりません。時間は30分くらいだった気がします。綺麗な棟の文学部ではなく、旧い方の文学部棟にあるK教授の部屋で、K教授・N教授・K倉教授・O教授の4人に様々な質問を投げかけられます。「君の卒論の〇〇ページの〇行目のこの部分だけど、他の書物では△△と言われているけど、どっちが正しいの?」「君の研究は先行研究に対してどれほどの価値を持ちえているのですか?」「当時の陸軍の現状は、君の考えている現状ではないと思うのだが、どの書物からこの意見を出したのかね」…などの質問です。まったくうまく答えた気がしませんでした。夕暮れ時に教授の部屋を出た瞬間、私は不合格を予想しました。筆記試験の出来、口頭試験の出来、総合的に考えると合格している余地はまったくありません。合格発表は数日経った1月の終わりごろだった気がします。この時期に不合格になると、就職もできません。200%ニート確定です。合格発表までの3日間くらい、私は真剣に悩みました。院試に落ちた人は、わざと単位を全部取得せず、留年という形を取って、次年度に院試を受けるという流れを取りがちでした。こうすると学生という身分は保証されます。また、一旦卒業して、聴講生という形態で、図書館などを利用しつつ、卒論ゼミに参加しつつ、院試を目指す流れもありました。他の道は、留年しながら就職活動に切り換えて就職するという道です。3日間考えましたが、なかなか結論が出ません。留年してまで院に行きたいとは思わなかったからです。なんせ消去法で選んだ道ですからね。かと言って就職する気にもならない。全然将来が決まりませんでした。何も決まらないまま合格発表の日を迎え、発表の3時になります。でも、私は3時に文学部掲示板に行くことはしませんでした。だって、3時に行ったら、優秀な友人達が院合格に大喜びしていて、落ちた私を見かけたら、その楽しい空気を崩してしまうと考えたからです。だから、夕刻遅くの6時前に見に行きました。行きはJRや京阪電車で、何度ため息をついたでしょう。

何だったら到着しなければいいさとも思いました。そして、出町柳の駅を降り、小関布団店の前を通り、「狭き門より入れ」と書いた聖書の一節が書いてある看板を通り過ぎて、じわじわ大学が近づいてきました。百万遍の交差点を渡る頃にはじんわり涙目になっていたと思います。浪人してまで京大に入ったのに、末路はニートなのか…、帰って両親にどう報告すればいいのだろう、両親に報告するうまい理由を考えるには帰途の電車の時間では足りないだろうよ…こんなことを考え考えしていても到着してしまいました。は一。一応受験票の番号を確かめて、“この顔を上げれば人生が変わるぞ、準備は整ったのか”と自分に言い聞かせ、大きく息を吐いてから掲示板の番号を探します。すると、な、な、なんとつつ、自分の番号があるではないですか!!!!!!おージーザス!ありえない出来事に感動の潮が込み上げます。京大に合格したときよりも何十倍も嬉しかった瞬間です。“これで人生つながった~”というそこはかとない安心感にまみれます。で、誰も残っていないと思っていたら、友人のO・N君を見かけました。「O君、俺受かったよ~」とテンション高く言うも、「そりゃ南くんなら受かるでしょ」とさらっとした感じ。感動は分かち合えなかったですが、微妙にほめられている気もしたので良しとしておきましょう。その後、同じ現代史学の院試に合格したK・M君(L3)を見つけます。とりあえず、2人で教授の部屋に行って、「ありがとうございます」と報告し、「南君の英語はぎりぎりだったよ~」と冷やかされながら、教授の部屋を後にします。“せっかくだから祝杯だ”ってなわけでK・M君と晩飯を食べに行くことになりました。晩飯をたらふく食べて浮かれているK・M君に対して私は、「もしかしたら休学、いや、退学するかもしれへんわ…」と話して店を出ました。

今回は、大学院の話をしていきたいと思います。